

12誘導ホルター心電図による Brugada 症候群の日内ST変動の検討

渡辺則和* 小林洋一* 伊藤啓之* 小貫龍也* 三好史人* 河村光晴* 劉 俊昌* 浅野 拓*
丹野 郁* 片桐 敬*

*昭和大学医学部第三内科

【目的】12誘導ホルター心電図(12HDCG)を用い、Brugada症候群の前胸部ST変動による突然死リスクの層別化の可能性を検討した。

【方法】Brugada型心電図を示す11例に対し、12HDCGを施行し、1時間ごとのST高を測定した。V₁-V₃誘導の平均ST高、ST高の最大・最小の差、ST高の変動をBrugada型心電図症例11例のうち、持続性心室性不整脈の既往がある3例(E群)とその他の8例(Non-E群)に分け、比較検討した。

【結果】E群のV₂誘導でのみ平均ST高(55.4 ± 23.2 vs 30.4 ± 12.2)、ST高の最大・最小の差(58.3 ± 27.5 vs 20.0 ± 14.0)、ST高の変動(16.2 ± 7.8 vs 6.5 ± 4.5)はNon-E群に比べ有意な差を認めた(単位×100mV、各々p<0.05)。

【結論】12HDCGは24時間のBrugada症候群における前胸部誘導のST高を評価可能であり、STの変動が致死性不整脈発生の予知因子になる可能性が示唆された。

Keywords ● 12誘導ホルター心電図 ● Brugada症候群 ● ST変化